

市史広報

第17号

音でたどる尾道の今昔

〈近代・現代編の尾道音楽史より〉



昭和30年(1955)代の尾道みなと祭から、旅館組合によるお囃子パレード(本通り商店街)

尾道といえば、文学や映画作品の舞台として知られますが、音楽ではどうでしょう。誰もが知る歌や音楽家の名前となると、なかなか出てこないのではないのでしょうか。

けれども、歴史を紐解けば、この街は古くから華やかな音や声(こゝろ)で溢れていたことがわかります。

たとえば、能楽や箏を嗜む裕福な商人、あるいはちよんがれ節や浪花節を詠じる行商人、また海運の要所として栄えたこともあり、旅人を癒す芝居小屋には歌舞伎の一座が来演し、花街では芸妓たちが三味線や小唄で座敷を盛り上げました。

日本の響きばかりではありません。明治に入って西洋から到来した楽の音はまもなくこの尾道にも届きます。なかでも特に人々を惹きつけたのは、黒くて大きなグランド・ピアノの存在でした。しかも、スタインウェイとベヒシュタインという、いずれも世界三大メーカーと称されるピアノ・ブランドの二つが、市内の公立学校に相次いで

設置されたのです。子どもたちの歌声を支えるのはもちろんのこと、市外から訪れた多くの名手たちがこれらのピアノとともに美しい音色を奏で、市民の心を慰めていきました。

今回の「市史広報」特集では、明治から昭和へと続く尾道の歴史について、音楽の視点からみていくものです。現在進められている尾道市史編さん事業の近代・現代編の調査において明らかになった事実や資料をもとに、その一部を紹介していきます。

この特集を通して、この街を流れる歴史の音に耳を澄ましてみてください。

特集監修及び担当執筆

尾道市史編集委員会専門部会(近代)委員

能登原 由美 (大阪音楽大学特任准教授)

尾道市史編集委員会専門部会(現代)委員

光平 有希 (国際日本文化研究センター助教)



昭和30年(1955)代の尾道みなと祭パレードより

賑わう邦楽の音

尾道では古くから歌舞音曲が盛んでした。江戸末期から明治にかけて活躍した地歌音曲の大家で、広島県重要文化財の『葛原勾当日記』を書いた葛原勾当（ぐずはらこうとう）は、深安郡神辺町（現在の福山市）の生まれで同地で箏の伝授を行いました。けれども、文政10年（1827）から始まるその日記を紐解くと、江戸時代の終わり頃には尾道で頻繁に出稽古をしていたことがわかります。彼は幼い頃に両目を失明したこともあり、記述の多くは滞在先や弟子の名前（富吉屋や灰屋・中灰屋など豪商の名が並ぶ）、おさらいをした曲の名を簡単に羅列しただけのものですが、それだけに次の長い一文は目を惹きます。当地の門弟が熱心に箏や三味線に打ち込む様子が想像されます。

「早く尾道に行かんとぞおもう。なぜといえは、弟子中が皆々余り執心なれば、如何ばかりか悦ばるるであらうと思えばなり。」（『葛原勾当日記』天保8年（1837）9月25日付）

尾道出身の箏曲家で、明治から大正にかけて活躍した武内檢校（城継）も弟子の一人です。武内も幼少期に視力を失い、5歳で勾当に師事。8歳から箏の教授を始めたといわれ、その後、数多くの奏者を育てるとともに作曲も行いました。昭和2年（1927）9月に亡くなりますが、その翌年の春には彼の追悼音楽会が市内で盛大に行われています。

なお、勾当の孫、葛原しげるは、「ドンドンヒヤララドンヒヤララ〜」で知られる『村祭り』の詞を手がけるなど、大正から昭和初期にかけて人気を博す童謡作家となりました。

一方、尾道では三絃、謡曲、常磐津なども盛んで、愛好家たちが劇場などで頻繁に発表会を開いていたことが、当時の新聞記事からうかがえます。なかでも「素人浄瑠璃大会」や「素人義太夫大会」の開催など、浄瑠璃やその一種である義太夫が人気芸能の一つでしたが、その中から日本の浪曲界を代表する人物が輩出されました。

明治10年（1877）、尾道で行商をしていた父親のもとに生まれた初代京山小円（小圓）は、本名を吉田松吉といい、幼い頃から義太夫を嗜むとともに「ちよんがれ節」を歌って人々を楽しませていました。京山派の浪曲師、2代目京山恭安齋に弟子入りしたのちに大成し、「浪界三傑の一人」と称されるなど、明治から大正にかけて日本を代表する浪曲師として活躍しますが、昭和3年（1928）に52歳の若さで、京都で亡くなっています。（能登原）

【新聞資料より：芸備日日新聞、昭和11年（1936）2月8日付記事「素人浄瑠璃会 尾道市で開催」】
 浄瑠璃で知られている港尾道市の素義界の権威者として知られてゐる『まじめ太夫』こと越智陽吉氏は今回姫路市の浄瑠璃界の第一人者として関西中国にその名を知られてゐる柴原是閑氏を招聘して来る十日午後六時から尾道市本通り小西呉服店楼上で素人浄瑠璃大会を開催することになった。同

ご当地ソングが描いた「尾道」

◆戦前：中山晋平作曲の「尾道小唄」

「鉄道唱歌」や「県民歌」など、それぞれの土地の名跡や景勝を盛り込んだ歌は明治の終わり頃から各地で作られるようになります。今でいえば「ご当地ソング」と言われるものですが、尾道でもそうした歌が大正時代に現れるようになります。

その初期の例として知られるのが『尾道小唄』です。歌詞を市民公募（作詞者名は不明）、中山晋平によつて作曲されたこの曲は、大正14年（1925）11月20日、日本舞踊藤蔭流の創始者、藤間静枝の舞踊とともに借楽座（前写真真参照）において発表されました。

その後昭和4年（1929）には中山による指揮のもと、いずれも尾道新地検査の芸妓であった小鈴、友菊（唄）、お染、盆良（三味線）によつてレコードに吹き込まれ、ビクターより発売されています。そればかりか、映画の制作やラジオ番組の実況中継でも地元芸妓連が歌うなど、尾道の街を大いに盛り立てました。歌詞は時代や伝承者によつて若干異なりますが、レコード版の出だしは次のようなものです。

私や尾の道 波止場の生まれヨ
 出ふね入りふね 見てくらすヨ
 エンヤラホ ギッチャラホ エンヤラホ

備後尾の道 千光寺の桜ヨ
 上り下りの 船に散るヨ
 エンヤラホ ギッチャラホ エンヤラホ

こうした「尾道ソング」はその後も続きます。昭和9年（1934）には、歌詞を一般公募し古閑裕而が曲をつけた『尾道音頭』が、翌10年には『新小唄 尾道港囃し』（木下潤作詞・長津弥作曲）が作られました。また、11年には『向島ドック音頭』も生まれています。ドックで働く職工たちの慰安のために作られたもので、造船業が盛んであった往時の音風景が蘇ってくるようです。

瀬戸は尾道、入船出船
 トンコトンコ ナオイナオイ
 送り迎へのあの向島
 トンコトンコトンコ スッチョイナ

打てばハンマーの音もこだまする
 をこの意気に散るあの火花
 恋のリベットうつたるからは
 離りやせぬぞえわしや主のそば

なお、『尾道小唄』や『尾道音頭』は、戦後になっても祭りなどの催事には街の界限で歌われていたといえます。書かれてからすでに100年。現在の尾道でその節が聞かれることはあるでしょうか。（能登原）

【引用・参考資料】：森岡久元『尾道小唄』の歌詞を追い求めて『尾道市立大学地域総合センター叢書10』所収、同センター、2019年刊▼「大阪 朝日新聞」

夜のプログラムは左の通り ※■は文字潰れて判読不可能。
 寶の入船入■△日吉丸■佐々木まじ子△ひばり山■越智仙里△三勝半七■田佳仙△本蔵下屋敷■作田喜昇△合邦が辻■川口真鶴△菅原傳授手習鑑■柴原是閑

尾道新地に在った芝居小屋「借楽座」では、演劇はもとより種々の芸能が上演され、尾道町内における娯楽の殿堂だった。戦後は尾道東宝劇場へ尾道セントラル劇場の名で洋画専門の映画館に転じ、その跡地には尾道市教育会館が建つ。大正末期の写真絵葉書より（尾道学研究会蔵）。



借楽座は大正の終わりから昭和の初めにかけて、2度の大火に見舞われた。絵葉書は大正13年（1924）の焼失から再建（翌年）された時の記念で制作・発行されたもので、建物はそれまでの木造からコンクリート建築に改められた。

◆戦後：歌謡曲や演歌で歌われる「尾道」

昭和30年代後半以降、多くの歌謡曲や演歌でも尾道の風景が描かれます。昭和37年（1962）に岡義夫の「瀬戸内の人」、守屋浩・五月みどりの「新尾道音頭」、昭和38年（1963）は尾道市出身の平田夕子の「巡航の人」、「あなたに故郷の潮風を」、昭和40年（1965）はフランク永井が本四架橋、後のしまなみ海道架橋を歌った「でっかい夢」が出されます。なかでも昭和41年（1966）、港町に生きる女性の哀愁をテーマにした北島三郎による「尾道の女」は大きな反響を呼び、「尾道」という地名を全国的に知らしめる決定的な一曲となりました。

以後、尾道は「情緒ある港町」として演歌の世界に定着していきます。こうしたご当地ソングの広がりには、家庭にレコードが普及したことも深く関係しています。市内には楽器店や蓄音器商、音楽茶房が立ち並び、人々はレコードを通じて音楽を楽しみまわした。尾道の風景は歌となり、レコードとなって全国へと運ばれ、街の記憶として今日まで受け継がれていきました。（光平）



ご当地ソングの一つ「新小唄尾道港囃し」のレコード（寄贈資料・尾道市史編さん委員会事務局蔵）。作詞：木下潤、作曲：長津弥、唄：虎龍、演奏：タイハイ合唱団・タイハイ和洋楽団、制作・発売元：タイハイレコード。大毎（大阪毎日新聞）尾道通信部懸賞募集一等当選歌で福山市の木下氏の歌詞が入選。片面は「流行歌木の江小唄」（唄：橋本一郎）が収録される。

久保小学校のピアノ

〜尾道の100年を知る「生き証人」〜

日本では明治に入り、社会のあらゆる面に欧米の影響が見られるようになりました。音楽教育もその一つで、学校で教える音楽の授業では、ドレミといった西洋式音階や五線譜の使用に加え、発声法や作曲様式など、それまでの伝統から大きく離れたシステムが採用されるようになります。西洋楽器の使用もその一つで、明治の初めに全国の学校でオルガンが導入され始め、やがてピアノも普及していきました。



旧久保小学校体育館に保管されるスタインウェイピアノ（能登原由美撮影）

明治末から大正にかけて、各地の学校で「ピアノ開き」と称するお披露目コンサートが盛んに開かれるようになります。

尾道で最初にピアノが入った時期やその場所については、正確なことはわかりません。けれども、尾道高等女学校の場合、大正4年（1915）に開催された音楽会の演目にピアノ演奏が含まれていることから、その頃までには同校にピアノが置かれていたようです。また、大正14年（1925）10月3日には、土堂小学校においてもグランド・ピアノのお披露目会が行われており、大正から昭和初期にかけて、市内各地の学校に設置されていったとみられます。

そうしたなか、久保小学校には世界を代表する楽器メーカー、「ニューヨーク・スタインウェイ」社製のピアノがやってきました。以前から同校にもピアノはありましたが、大正11年（1922）、学校創立50周年を記念して保護者会が寄贈したものです。以来、昭和の初めまでに多くの音楽家が来尾し、この銘器とともにコンサートを行っています。なかでも目を引くのは世界的オペラ歌手、藤原義江のリサイタルです。昭和9年（1934）3月16日に開かれた公演の様子を伝える記事では、講堂に2千人もの観客が詰めかけたとあります。

その後、このピアノは数十年にもわたって子供たちの歌声を支えてきましたが、経年劣化により徐々に使われなくなつていきます。けれども、製造から100年を迎える直前の平成9年（1997）、卒業生や地域の人々からの寄付により、大阪の修復師のもとで1年をかけて修理が施され、再び美しい音を奏でるようになりました。

それからさらに30年近く経過し、明治32年（1899）生まれのこのピアノも今年で127歳を迎えます。今では尾道の歴史をもっともよく知る「生き証人」として、ますます重要な役割を果たすことでしょう。（能登原）

平成9年（1997）から翌10年（1998）にかけて行われた旧久保小学校所蔵のスタインウェイピアノの修復を報じる「山陽日日新聞」記事（97年5月31日付）。修復記念のジャズ・コンサートは同校創立125周年の記念も冠して、98年10月26日に同体育館で開かれた。

百歳目前の「名器」甦れ

「トモ」 河野康弘と愉快的仲間達

久保小のピアノ
九十八年の歴史を刻む久保町、久保小学校（高橋俊英校長）の米国製グランドピアノを修復しようとして、久保地区の住民組織が一丸となってチャリティコンサートを開くなど資金づくりに取り組んでいる。



戦後復興と音楽

昭和21年（1946）5月、尾道駅前前の鶴水館跡に「第一劇場」の建設が始まります。尾道劇場や湊座を失った後、この劇場の誕生は戦後の尾道における文化再生を象徴する出来事でした。西洋小屋根を採用したこの小劇場は、1階428名、2階315名、計743名を収容し、同年11月に開場しました。のちに尾道松竹と改称され映画上映をはじめ、演劇や音楽興行の中心として、市民に親しまれていきます。

駅前周辺では、進駐軍専用のダンスホールやキャバレー上海が相次いで開業し、元ポリドル歌手鈴木木初子を招いた開店披露も行われました。さらに高橋興行部の誕生により、浪曲、軽音楽、歌謡ショーなど、多彩な興行が継続的に開催されるようになります。東宝や第一劇場では、灰田勝彦、松平晃、二葉あき子、林伊佐緒らが出演し、当時の流行や人気を反映した舞台が市民を魅せました。停電下でも「停電でも開演」と掲げて実施された浪曲大会からは芸能を絶やさぬ熱意と工夫がうかがえます。

一方で音楽文化を支えたのは興行だけではなく、音楽会が各地で開催され、モーツァルトやシューベルト、ベートーヴェンといったクラシック音楽から、ポレロ、ラ・クンパルシーター、夜のタンゴまで、幅広い楽曲が演奏されました。洋楽・邦楽の双方が市民の身近な存在として受け入れられていたことが分かります。

〔引用・参考資料〕「山陽日日新聞」、「中国新聞」、「戦後の足跡」（山陽日日新聞社、1972年刊）

尾道東高校のピアノ

〜戦前から未来へ響く音色〜

尾道市東久保町にある県立尾道東高等学校には、ドイツの名門ピアノメーカー「ベヒシュタイン」社製のフルコンサートグランドピアノが今も大切に受け継がれています。このピアノが寄贈されたのは昭和6年（1931）のことで、当時の前身である広島県立尾道高等女学校は創立20周年記念事業として講堂を建設し、同窓会が全国から募った寄付金で同ピアノを購入・寄贈しました。



尾道東高校体育館に保管されるベヒシュタインピアノ（光平有希撮影）

当時、ベヒシュタインは世界三大ピアノのひとつに数えられる高級楽器で、宮内庁や内閣総理大臣官邸にも納入された台数に同型が含まれていました。こうした名器が地方の学校に備えられたことはきわめて稀であり、尾道の人々が音楽文化を大切にしていた歴史を物語っています。戦時中は、講堂が軍隊に使用され、このピアノも壊されそうになったことが伝えられていますが、女学生たちが椅子で隠して守ったという逸話も残されています。

戦後になると、備後興論社や尾道文化連盟がこの講堂を演奏会場として定期的な催しを開催し、長門美保（声楽）、四家文子（声楽）、五十嵐喜芳（声楽）、諏訪根自子（ヴァイオリン）、鰐淵賢舟（ヴァイオリン）ら多くの著名演奏家が来演し、この名器を伴奏に尾道の地に美しい音色を響かせました。また、昭和28年（1953）に来日したピアノリストのソロモン・カトナーは「東高のピアノでないと演奏しない」とまで言ったと伝えられ、広島での演奏にこのピアノを運搬して使われたという記録もあります。

その後、平成2年（1990）には同窓会の寄付で完全修復が行われました。修復後は演奏会や記念行事に活用され、平成3年（1991）には園田高弘ピアノリサイタルが開かれ、専門家からもその音色の良さが高く評価されています。また、令和元年（2019）には尾道東高等学校創立110周年記念事業としてピアノリストのイリーナ・メジューエワも演奏しました。

このピアノは単なる歴史的遺物ではなく、戦前から戦後、そして現在へと尾道の音楽文化をつなぐ象徴的存在です。これからも生徒たちの演奏などを通じて、未来へ響き続けていくことでしょう。（光平）

音楽茶房の追憶



尾道に見る喫茶店には、「画廊喫茶」と呼ばれる美術作品を展示するギャラリー併設の店舗が見られます。昔と比較するとその数は減りましたが、文化都市尾道らしさを感じさせるものがあります。

この画廊喫茶と並んで、「音楽喫茶」、「音楽茶房」を冠した喫茶店もあつたことが、その昔に出回つた広告マッチから分かります。尾道町内にあつた主な音楽喫茶・音楽茶房をマッチから拾うと次の通りです。

◆欧風純音楽茶房琥珀(旧店名はフジヤ)：久保千日前◆純喫茶ピクトリヤ：久保新開仲の町◆名曲喫茶田園：千光寺下国道筋◆音楽茶房孔雀荘：尾道駅裏。

フジヤ改め琥珀は、「中国地方唯一の大ハイファイ装置と階上コンサートホール」を備えることが当時の地元新聞広告に載り、イタリア大理石を敷く「高級音楽茶房」とあります。

ピクトリヤは、洋酒喫茶・貝の店ロダンと同じ建物で営業した店舗で、こちらも豪華なステレオが備えられ、流れる音楽の主体はフテン音楽だったようです。

孔雀荘は画廊喫茶として知られましたが、「名曲と珈琲」、「名曲と美術の殿堂」と広告に謳われ、絵画と共に音楽鑑賞(レコードによる)も楽しめる喫茶店だったようです。

インスタ映えの言葉に象徴されるように、とかくお洒落さや可愛らしさばかりが先行しがちで、どれも同じように見えてしまう今時カフェにあつて、こうした上質感や深味を感じさせる、尾道らしい文化的カフェの存在やその良さも、見失いたくないところです。

(事務局)

「マッチラベル」：何れも個人コレクションより。
 「参考資料」：『山陽日日新聞』、林良司編著『失われた風景』所収「画廊喫茶と音楽茶房」(編人・2022年刊)。



尾道に関する資料求む！

尾道に関する文書(文字資料)、写真、映像、地図、尾道的话题を報じる新聞・雑誌、尾道関係の図書など、市史編さん委員会事務局及び文化振興課では、幅広い分野にまたがり、史資料の収集に努めています。他に地域に伝わる言い伝え(昔話)や風習、祭礼、芸能など、無形のものも対象となります。資料・情報の提供については文化財係または下記事務局までご連絡ください。受付時間は平日8:30～17:15 電話：0848-20-7425(文化財係)

編集後記

外に開けた港町として多くの人やモノが入りし、行き交つた尾道では、商工業の賑わいと並んで文化・芸能の面でも時代を通して賑わい、令和の今に至っています。その中の音楽だけ見ても、先人から繋がれて来た歴史の厚みや深味を感じられたのではないのでしょうか。尾道は「音楽のまち」でもあります。

- ① 文化財編 上巻 販売中：二七〇〇円
- ② 資料編 近世 販売中：三〇〇〇円
- ③ 地理編
- ④ 資料編 考古、古代・中世
- ⑤ 資料編 近代・現代
- ⑥ 文化財編 下巻
- ⑦ 通史編 近世
- ⑧ 通史編 近代
- ⑨ 通史編 原始・古代・中世
- ⑩ 民俗編
- ⑪ 通史編 現代

市制施行120周年にあたる平成30年度(2018)をふりだしに、令和10年度(2028)までの11年計画で、新市域を網羅した新尾道市史を随時刊行して参ります。

『新尾道市史』全11巻ラインナップ